

審査の結果の要旨

氏名 花澤 信太郎

本論文は近代都市計画導入以前の関東平野における都市と集落の街路構成に関して、一定の規則性とその原理を見いだすことを目的としている。具体的には1880年から1886年にかけて陸軍参謀本部によって作製されたわが国初の近代的地形図である「第一軍管地方二万分一迅速測図原図」をもとに、東京を除く関東地方の一定規模以上の都市及び集落について、街路形態の分析を行っている。主要な関心は、江戸四宿と呼ばれた品川宿、板橋宿、内藤新宿、千住宿の各宿場町の比較分析、東海道、中山道、甲州道中、日光道中の主要な宿場町の形態の比較分析、その他の都市の構成の比較分析から成っている。

第1章は研究の目的と方法について述べ、既往研究のレビューをおこなっている。

第2章は関東平野における近代都市計画導入以前の都市の形成史に関して概観している。

第3章は本論文で分析に用いる「第一軍管地方二万分一迅速測図原図」の特色を述べ、その資料批判をおこなっている。

第4章以降が本論の主要な分析部分である。

第4章では、主要街路の形態について、線分から成るもの、線分により湾曲された形態に形成されたもの、街路の中央部に曲線部分があるものなど合計12に分類し、地形の制約があるなかでも伝統的な都市の街路の形態においては選択性が確保されており、そこには計画的意図が可能であったことを論証している。

第5章では、江戸四宿において詳細な街路形態分析をおこなっている。その結果、景観を演出するための街路構成が認められること、橋周辺における街路形態の意図的な屈曲が共通していることが確認されている。

第6章では、江戸からの五街道の宿場町をひろく対象とした広域的な形態分析をおこなっている。その結果、それぞれの街道ごとに宿場町の街路構成に固有の原理が認められることが類推されている。

第7章では、主として単一の線分から成る都市、二本以上の線分から成り、街路に屈曲が認められる都市、街路の中央部に曲線の部分が存在する都市の三種類の街路形態を有する都市について、線的な都市構成の都市と面的な都市構成の都市のそれぞれ合計六分類について、街路構成の分析をおこなっている。その結果、線分のみから成る都市においても街路の屈曲や微細な曲線部の挿入がみられ、こうした屈曲部に当初からの計画意図の存在が類推されることを明らかにしている。さらに曲線部を有する都市においても、自然地形

による制約だけではなく、計画意図を類推することのできる例が存在することを明らかにしている。

第8章では、以上の考察を総合的にまとめ、街路の読解方法に関して一般的な手法が存在し得ることを示している。すなわち、自然地理的な条件に計画意図が重ね合わされて都市の街路構成がおこなわれていること、その計画意図は街路の屈曲の角度によって示される場合と曲線によって示される場合があること、空間構成の変化は1 km 以下の空間単位によって分節されることが示されている。

第9章では、これまでに見いだされた知見をまとめている。

このように本論文はこれまで自然発生的として、あるいは単なる宿場町の空間構成として一括されてきた都市の街路構成に関して、近代初頭の比較的正確なをもとに、近代的都市計画による改変がおこなわれる直前の状態において、その空間的な計画意図のあり方を詳細に分類しつつ類推し、合理的な推論のもとにいくつかの計画意図の発現のあり方を明らかにしている。分析の出発点となった第一軍管地方二万分一迅速測図原図をもとにしたこうした詳細な分析はこれまでおこなわれたことがなく、分析の結果が新しいだけでなく、有意な類推結果を導き出すことに成功している。こうした分析結果は今後の都市保全の方法に多大な貢献をなしているといえるほか、近代の都市計画における空間構成の手法に新しい視点をもたらしたものとして評価することができる。

よって本論文は博士（工学）の学位申請論文として合格と認められる。